

「トロッコ」 芥川龍之介より

しばらくののち茶店を出て来しなに、巻煙草を耳にはさんだ男は、トロッコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「ありがとう」と云った。が、直すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油のにおいがしみついていた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心はほかの事を考えていた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があつた。土工たちがその中へはいったあと、良平はトロッコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかつた。トロッコの車輪を蹴って見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛らせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にこう云つた。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」

「あんまり帰りが遅くなるとわれのうちでも心配するぞら」

良平は一瞬間あつけにとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮 母と岩村まで来たが、今日のみちはその三四倍ある事、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならぬ事、——そう云う事が一時にわかつたのである。良平はほとんど泣きそうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないと思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたようなおじぎをすると、どンドン線路伝いに走り出した。

良平はしばらく無我夢中に線路の側を走り続けた。その内にふところの菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それをみちばたへほり出すついでに、板ぞうりも其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけははるかに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駈け登つた。時時涙がこみ上げて来ると、自然に顔がゆがんで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つた。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山(ひがねやま)の空も、もう火照が消えかかっていた。良平は、いよいよ気が気でなかつた。行きと返りと変るせいか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗のぬれ通つたのが気になつたから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織をみちばたへ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助かれば——」良平はそう思いながら、すべってもつまずいても走って行った。

やっと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなった。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駆け続けた。

彼の村へは行って見ると、もう両側の家家には、電燈の光がさし合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはっきりわかった。井戸端に水を汲くんでいる女衆や、畑から帰って来る男衆は、良平があえぎあえぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼のうちの門口へ駆けこんだ時、良平はとうとう大声に、わっと泣き出さずにはいられなかった。その泣き声は彼のまわりへ、一時に父や母を集ませた。ことに母は何とか云いながら、良平の体をかかえるようにした。が、良平は手足をもがきながら、すすり上げすすり上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集って来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣くわけを尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかった。あの遠い路を駆け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、……………

良平は二十六の年、妻子と一しょに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵労に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。……………